

専門用語辞書の「をも見よ」参照に関する調査研究

—項目間の意味的關係を手掛かりとして—

A Research of 'See Also' Reference in the Terminological Dictionary: Using Semantic Relations between Entries

福田 求*¹, 影浦 峽*²
Motomu Fukuda Kyo Kageura

Résumé

The purpose of this study is to clarify the nature and functions of 'see also' references in the terminological dictionary. In order to accomplish the purpose, we surveyed 'see also' references in three terminological dictionaries, using semantic relations between referring entries and referred entries as a key.

As a result, we could clarify the following points:

- (1) major types of semantic relations between referring and referred entries and their quantitative tendencies,
- (2) correlations between general nature of dictionaries and overall tendencies of 'see also' references,
- (3) some tendencies concerning the directions of references under some semantic relations, and
- (4) correlations between the nature of dictionaries and the directions of 'see also' references.

I. はじめに

II. 調査対象としての辞書とその参照語

A. 辞書の選択

B. 参照語

III. 「をも見よ」参照の分類に用いた意味関係

A. 意味関係の役割

B. 意味関係の種類

IV. 調査結果と考察——専門用語辞書における

*¹ 福田求: 東京大学教育学研究科, 東京都文京区本郷 7-3-1

Motomu Fukuda: Graduate School of Education, University of Tokyo, 7-3-1, Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo.

*² 影浦峽: 学術情報センター研究開発部, 東京都文京区大塚 3-29-1

Kyo Kageura: National Center for Science Information Systems, 3-29-1, Otsuka, Bunkyo-ku, Tokyo.

1993年11月30日受付

「をも見よ」参照のあり方

- A. 全体的傾向
- B. 個別の関係について
- V. おわりに

I. はじめに

いわゆる学術情報が急激に増加するにつれて、学術コミュニケーションにおける専門用語の重要性がますます強く認められるようになってきた。専門用語、すなわちある専門分野で標準的に用いられる語を、研究者や学生等が学習しようとするとき、調べようとしている用語の完結した定義だけでなく、その用語を取り巻く一定範囲の事柄や状況に関する知識をも獲得する必要がある。例えば「体(たい)」という語は、数学の領域においては日常での意味とは異なって、四則算法の成立する集合を意味しており、また、数学の領域においては一緒に用いられ、互いに厳密に定義してある「環」や「群」との関わりで理解されることが望ましいとされているのである。

このように、用語は専門領域の概念体系を反映した領域に特有な関係を持つため、用語の理解を促すためには、単に用語が表す概念をそのものとして定義するだけでなく、用語を取り巻く体系を示す必要がある。用語の理解を促すための基本ツールである専門用語辞書には、このような役割が期待されている。専門用語辞書は、全体を通読してその中に含まれる概念を読者が再構成し、体系付けるといった読まれ方をしないので、一部分を参照するだけでもこの必要性に応えなければならない。その役割を担うために、専門用語辞書中に、用語同士の関係を利用者に示す「参照語」フィールドが存在する。参照語とは、ある見出し語(によって代表される項目)から参照される、意味的に関連した語であり、この語が参照語フィールドに記入されていることによって、見出し語(によって代表される項目)同士が関係付けられるのである。

さて、現在、辞書そのものの研究は増加しており、特に定義のしかたや辞書の編纂プロセス、構成法などに関する研究が進められている¹⁾²⁾³⁾⁴⁾⁵⁾⁶⁾。けれども、参照語について言うならば、それが、定義を補完し、見出し語の領域中での位置づけを明確化することによって見出し語に関する理解を深めるといふ重要な役割を持つにもかかわらず、これまであまり研究されておらず、そもそも辞書における参照語というものの詳細な性質や位置づけ

が明らかになっていない⁸⁾。そのため、実際の辞書作成過程では、見出し語と関連する用語のうち、執筆者や編集者が思いついたもの、目についたものを挙げるといった程度のゆるやかな指針で参照語が付加されることが多く、結果として、一つの辞書全体での参照語の一貫性が保証されないことになってしまう。

こうした状況を考えると、参照語を付加する際のある程度具体的な規範や指針が必要とされていることは明らかであり、そのために参照語の役割や性質を詳細に検討する必要がある。そこで本研究では、「をも見よ」参照を取り上げ、いくつかの専門用語辞書を対象に、(1)見出し語と参照語との間の意味関係を分類・整理し、さらに(2)その結果を辞書というツールの性質を考慮しつつ質的に分析する⁹⁾。

「をも見よ」参照のみを取り上げたのは、辞書中での役割が「を見よ」参照とかなり異なっており、参照語についての調査・分析があまり進んでいない現在、両者を一緒に分析する意義は少ないと判断したからである。「を見よ」参照の調査・分析および「をも見よ」参照と「を見よ」参照との比較については、順次行なっていく予定である。

II. 調査対象としての辞書とその参照語

A. 辞書の選択

調査対象としての辞書を選ぶにあたっては、一冊の辞書のみを対象とするやり方から分野も性質も異なる多数の辞書を対象とするやり方まで、いろいろな方法が考えられる。本研究では、同じ分野を扱っている複数の辞書を調査対象とした。分野を一つに絞ったのは、分野ごとの特性が辞書の性質にどのように関わってくるかわかっていない現段階では、異なる分野の辞書を対象として適切な考察を加えるのは難しいばかりでなく意味の無いものになる恐れがあるからである。一方、複数の辞書を対象としたのは、辞書の性質をしっかりと把握しておけば参照語のあり方に影響する諸要因を対比的に明らかにできる可能性が高いと同時に、分野によるある程度の偏向は免れないまでも、参照語の基本的な性質を一般的なものとして把握できると考えたからである。

本研究では用語の意味分類およびその解釈が必要となるので、対象分野に対する分析者の予備知識が必要となる。そこで今回は対象分野として図書館・情報学を選択した。『学術用語集 図書館情報学編 暫定版』¹⁰⁾に挙げられている用語辞書のリストを参考にして、(1) 用語辞書として体裁が整っていること(すなわち単なるパラフレーズ以上の定義を含み、かつ参照語がきちんと付与されているもの)、(2) 比較的良好に用いられていること、という2点を基準として、『ALA 図書館情報学辞典』、『図書館用語集』、『図書館用語辞典』を調査対象辞書とした¹¹⁾¹²⁾¹³⁾。これらは小項目～中項目主義をとる五十音順の辞書であり、どれも専門用語辞書としては標準的な類型に入るといってよい。けれども、それぞれの性格は異なっている。以下に、それぞれの辞書について認められる特徴を整理する。

① 『ALA 図書館情報学辞典』

見出し語約 4500 (そのうち定義の無い「を見よ」参照の項目数約40)。標準的な小項目主義の用語集で、定義は、基本的に、「上位語+限定部」という簡潔な形をとる。定義の部分では、それ以上の説明は、紛らわしい語との区別など、必要最小限に押さえられている。図書館・情報学の広い範囲をカバーしているが、原著は米国のものであるため、図書館のサービスや制度に関する用語に、米国固有の事情を反映したものが多く。

② 『図書館用語集』

見出し語約 1540 (そのうち定義の無い「を見よ」参照の項目数約 760)。日本における図書館・情報学分野の標準的な用語集である。「を見よ」参照で別の項目に導かれる項目が多いのは、関連する項目をある程度まとめて説明する中项目的な見出し語の立て方をしてしているためである。定義部分では、まず、見出し語の定義を「上位語+限定部」という形を基本として与えた上で、関連する用語の説明を展開していくという形となっている。したがって、中項目主義的に関連用語の説明をまとめて与えてはいるが、定義部分は、用語の定義を中心としており、見出し語を事項やテーマと見なしてそれに対する解説を加えるという傾向はあまり強くない。

③ 『図書館用語辞典』

見出し語約 2700 (そのうち定義の無い「を見よ」参照の項目数約800)。中項目主義的色彩が強い辞書で、見出し語として、重要な歴史的事項や出来事、

重要な出版物の具体的、個別のタイトルなども立てているという特徴がある。定義部分は、用語としての見出し語を定義するという範囲を越え、見出し語が表すテーマを説明する(主題解説的な)定義文を与えている場合が多い。3冊の辞書の中では、図書館関連事項事典という性格が目立って強いといえる。

B. 参照語

1. 「を見よ」参照における参照語の定義

I章では参照語を、簡単に「見出し語から参照される、意味的に関連した語」とした。「を見よ」参照に関して、この定義を広く解釈するならば、定義の最後に“→”などの記号で示された語のみでなく、定義文中で用いられ、見出し語としてもたてられている用語(しばしばこれらは太字や記号で強調されたりする)も参照語に含めることができよう。けれども、本研究ではこのような広い解釈は採らず、次の3つの基準を満たすものを参照語とする。

- (1) 定義文を含む項目中に存在すること。
- (2) 定義の後や前など、位置的に定義と一貫して区別できるような場所に存在すること。
- (3) 辞書中で一貫して維持される記号(例えば“→”)や言語表現(例えば“を参照のこと”)によって明示されていること。

この3つの基準を満たすものは、辞書の凡例で明示的に「を見よ」参照を示した部分とされるところに概ね一致する。これは、定義や見出し語などと同列に、辞書の1つの項目を構成する独立したフィールドとなっている¹⁴⁾。

「を見よ」参照には、二つの項目間で、互いに参照を出し合っている“相互「を見よ」参照”と、一方の項目から他方へのみ参照を出している、非対照的な“一方「を見よ」参照”とがある。この区別は、「を見よ」参照の性質を捉える上で意味があると思われるので、分析において考慮することにする。

2. 実際の辞書中における参照語の基本的性質

実際の分析にあたっては、三種類の辞書それぞれについて、見出し語が「あ」「か」「さ」「た」「な」「は」「ま」「や」「ら」「わ」で始まる項目をサンプルとして、そこから出されている参照語を検討の対象とした¹⁵⁾。ここで、調査した各辞書の見出し語と参照語に関する基本的データを示しておく(第1表、第2表、第3表を参照)。

専門用語辞書の「をも見よ」参照に関する調査研究

第1表 辞書中の項目に関するデータ

調査事項 辞書名	辞書中の項目 の総数 Ea 個	項目の標本 数 Es 個	$\frac{Es}{Ea}$	標本中で参照を出して いる項目の数 Er 個	$\frac{Er}{Es}$	絶対誤差
ALA 図書館情報学辞典	約 4500	953	0.212	160	0.168	3% 未満
図書館用語集 (JLA)	約 1540	563	0.366	74	0.131	3% 未満
図書館用語辞典 (角川)	約 2700	553	0.241	115	0.208	4% 未満

第2表 標本中の見出し語参照語間の関係

調査事項 辞書名	標本中で参照を出している項目の数 個							標本中の 参照語の 総数 Ra 個	$\frac{Ra}{Er}$
	出される 参照が1 個のもの	2個の もの	3個の もの	4個の もの	5個の もの	10個の もの	Er (合計)		
ALA 図書館情報学辞典	129	25	6	—	—	—	160	197	1.23
図書館用語集 (JLA)	56	10	4	2	1	1	74	111	1.50
図書館用語辞典 (角川)	95	16	2	1	1	—	115	142	1.23

第3表 標本中の参照語の内訳

調査事項 辞書名	標本中の一方方向の参照		標本中の相互の参照		標本中の 参照語の 総数 Ra 個
	参照語の 数 Ro 個	$\frac{Ro}{Ra}$	参照語の 数 Rm 個	$\frac{Rm}{Ra}$	
ALA 図書館情報学辞典	20	0.102	177	0.898	197
図書館用語集 (JLA)	49	0.441	62	0.559	111
図書館用語辞典 (角川)	130	0.915	12	0.085	142

第1表から、どの辞書の場合も、サンプルが母集団の20%を越えており、また、統計学的にも信頼度95%での絶対誤差が4%未満に抑えられていることがわかる。それぞれの辞書については、次のような特徴が認められる。

- ① 『ALA 図書館情報学辞典』は、1つの項目が参照を出す確率が16.8%で、『図書館用語集』と『図書館用語辞典』の間の値をとる(第1表)。1つの項目が出す参照の数は、3個以内とばらつきが少なく、8割割以上の項目が1個の参照を出している(第2表)。また、ほとんどが相互参照であり、一方方向参照はとも少ない(第3表)。
- ② 『図書館用語集』は、1つの項目が参照を出す確率が13.1%で、『ALA 図書館情報学辞典』や『図書館用語辞典』に比べて参照を出す項目が少ない(第1表)。1つの項目が出す参照の数は、平均1.5個であり、また、10個もの参照を出す場合もあり、他の

2つの辞書に比べて豊富であることがわかる(第2表)。また、一方方向参照よりも相互参照の割合が約56%とやや大きい(第3表)。

- ③ 『図書館用語辞典』は、1つの項目が参照を出す確率が20.8%で、他の2つの辞書に比べて大きい(第1表)。1つの項目が出す参照の数は、5個の場合もあるが、平均すると『ALA 図書館情報学辞典』と同じで、『図書館用語集』よりもはるかに少ない(第2表)。また、ほとんどが一方方向参照であり、相互参照は全体の1割にも満たない(第3表)。

III. 「をも見よ」参照の分類に用いた意味関係

I章で、参照語を分析する手掛かりとして見出し語と参照語との間の意味関係に着目すると述べた。本章ではまず、意味関係を最初の手掛かりとする理由を述べて本研究における意味関係の役割を明確にし、次に本研究で用いる意味関係を定義する。

A. 意味関係の役割

調査対象とした3つの辞書における「をも見よ」参照の一般的ガイドラインは、それぞれ以下のようになっている。

・『ALA 図書館情報学辞典』

“…反意語や関連語を示し、それらの定義と比べてみると定義間の相違点が明らかになり、違いを浮彫りにするように考えてある。”

・『図書館用語集』

“重要な関連語については各解説の末尾にある⇨の記号によって「をも見よ」の参照をつけた。⇨の記号はその本項目と⇨記号の右側に記された項目が相互に「をも見よ」参照になっていることを示している。”

・『図書館用語辞典』

“解説の末尾には、その語の理解に必要な上位概念の語、同類の語や対照語などを掲げて矢印(→)で参照できるようにした。”

これらのガイドラインの、「反意語や関連語」、「関連語」、「上位概念の語、同類の語や対照語」などの表現から、参照は何らかの意味関係にある項目の間に出されるものと考えられていることが伺える。このことは、今回対象とした3冊の辞書においてだけでなく、ほとんどの辞書で前提として認められている点であるといってい⁷⁸⁾。けれども、その一方で、凡例中で示されている「反意語」や「関連語」などの関係はとても曖昧で包括的な概念であるため、実際の辞書編集作業において、参照語の一貫性を保つのに役立つほど具体的・詳細な指針とはなりえないことも明らかである。つまり、意味関係は参照を規定する主要な要因であるという点は認められているが、どのような意味関係にある項目を参照を出す候補と考えるかについては、曖昧なままなのである。

実際のデータを分析するにあたって、項目間の意味関係のある程度詳しく分類整理することを出発点とするのは、このような背景による。実際、いかに辞書の機能に参照語の構成が依存しているようと、辞書の環境の外では全く関係を認められないような用語を、参照により見出し語と結びつけることはまずないであろう。したがって、意味関係という観点からの分類は、ほとんどの見出し語と参照語との間に適用できるはずであり、この点からも、分析の出発点としたは適切であろう。

これまで、どのような意味関係にある項目の間に参照が与えられ得るかについて実証的な分析が無かったという

背景を考えると、実際のデータに基づく意味関係の整理自体が一つの見るべき結果ではある。けれども、参照語間の意味関係を機械的に整理して並べるだけでは参照関係の性質を把握することにはならない。むしろ、重要なのは、意味関係の範囲を絞り込むことができたとして、そこから見えてくる参照のあり方が辞書の性質とどのように関わっているのかについて検討し、さらに、なぜ、どのようなときにどのような参照が出されるのかを考察することである。この観点からは、あくまでも意味関係の整理は手掛かりでしかない。前段落の末尾で意味関係による分類を“分析の出発点”とすると述べたのはこのような意味である。

B. 意味関係の種類

語と語の間の意味関係や概念間の関係については、言語学における意味論の研究、人工知能研究、ソーラスの研究などにおいて繰り返し検討されてきた¹⁶⁾¹⁷⁾¹⁸⁾。個々の研究で設けられる意味関係は、細かいレベルでは様々であり、完全に一致した意味関係のリストなどというものとは存在しない。けれども、意味関係を、上下関係や兄弟関係などを中心とする系列的関係と、文中での意味的役割に相当するような関係を中心とする統合的關係とに区別することができるという点は多くの文献で認められている。

今回の研究では、最上位でこの区別を採用し、その枠組みの中で国広¹⁶⁾とCruse¹⁷⁾の意味関係を基本として、黒橋他¹⁹⁾も参照しながら、より詳細な意味関係の初期リストを作成した。次に、パイロット調査で、その初期リストを用いたサンプル・データの分類作業を行ない、意味関係の細かい調整を行なった後、最終的な意味関係を決定した。

それぞれの関係には、見出し語と参照語との間の方向性をも考慮した記号(例えば上下関係にある場合、どちらが上位でどちらが下位かを示す記号)を付与した。以下に、決定した意味関係を、それぞれに付与した記号(A, A, A1, Da 等)と共に示す。なお、以下の意味関係の説明においては、「参照語」、「見出し語」をそれぞれ、参照語、見出し語が示すものまたは概念とする。また、用いた例は、実際の辞書のデータを分類した結果からのものである。

A 系列的関係

系列的関係は、日常の無限の経験を固定的に一定の方法でカテゴリー化し、まとめあげる認識を反映してい

る。この関係は、文中中のある一つの語彙的な位置を潜在的に占めうる複数の語の間に見られる関係ということもできる¹⁷⁾。ここでは、系列的関係を兄弟関係、上下関係、および全体部分関係の3つに大別し、さらに兄弟関係は4つに区別した。

A 兄弟関係

兄弟関係は、大まかに、「2つ以上の語がほぼ対等で、それらが広い意味での『場』といったものを構成する場合に、それらの語の間に成り立つ関係である」と定義できる。この関係は、さらに詳細に以下の4つに分類できる。

A1 非両立共下位関係

非両立共下位関係は、解釈の揺れは別として、相互に意味の重なりがなく（すなわち外延の集合に共通部分がなく）、かつ共通の上位語または安定した上位概念が「場」として存在するような複数の語の間に成り立つ関係である²⁰⁾。

例) アナログ計算機 → デジタル計算機

この例の2つの用語の場は「計算機」である。

A2 独立兄弟関係

独立兄弟関係は、相補的な関係にあって一つの場を構成しながら、その和の形以外では上位語または概念を認められない場合に成り立つ関係である。

例) 貸出方式 → 閲覧方式

この例の2つの用語が構成する場は、「貸出方式」と「閲覧方式」の和によって表されるものであり、それをあえて説明するならば、「図書館利用者が図書館資料を利用できるようにするサービスの方法、方式」とすることができよう。

A3 依存兄弟関係

依存兄弟関係は、すぐ上の上位語は存在しないが、2レベルより上に上位語が存在し、その中で独立兄弟関係と同じように、それだけで他の共下位概念から区別される独立した場を形成するような関係である。

例) 最高位数字 → 最低位数字

この例では、2レベル以上の上位語としては「数字」がある。その「数字」全体の中でこの2つの用語が「位取り記数法において意味を持つ数字」という場を形成しており、それ以外の場が「数字」の中の共下位概念となっている。

A4 類義関係、同義関係、両立共下位関係

これらはいずれも意味的に重なりがある（外延集合に共通部分が存在する）関係である。同義語は原則として重なっていない部分がなく、類義語では非常に少なく、両立共下位語ではある程度大きい。

例) 刊行 → 出版

この例の2つの用語が構成する場は、「刊行」と「出版」の和によって表されるものであり、それをあえて説明するならば、「図書等を印刷して世に出すこと」とすることができよう。

以上の兄弟関係は、定義としては明確であるが、意味的な重なりから判断できる A4 を除いては、その領域の上位語の存在などに判断が依存するため、実際の関係の分類作業において難しい場合があることは認めなくてはならない。

B 上下関係

Ba 「参照語」が「見出し語」の上位概念である。

Bb 「参照語」が「見出し語」の下位概念である。

一方の意味が他方の意味よりも広く、従って外延が大きい場合に成り立つ関係で、一般に外延の大きい方から小さい方への内包的特徴の継承性がある。いわば生物の分類に相当する関係で、類種関係とも包摂関係とも言われる。

例) 片面書架 → 書架 (Ba)

C 全体部分関係

Ca 「参照語」が「見出し語」を含む全体である。

Cb 「参照語」が「見出し語」の部分である。

「家」と「ドア」のような、全体とその構成要素または部分の関係がこれにあたる。

例) 棚板 → 書架 (Ca)

また「雲」「霞」と「雲霞」のように、用語の成立過程を考えたときに、まず形式的な階層の下位にある用語があつて、それを合わせ呼ぶ形²¹⁾で上位の用語が作られたときも全体部分関係とした。

例) 漢籍 → 和漢書 (Ca)

なお、動作・イベント概念を表わす用語に関しては、上下関係と全体部分関係を分けて論じる必要性が見受けられなかったので、B の上下関係に含めた。

イ 統合的關係

統合的關係は、典型的には談話の結束性に関わるもので、例えば文における a-b-c という要素の並びの間に認められる関係である。意味的役割のような関係は、典型的な統合的關係といつてよいであろう。本研究では、

パイロット調査による意味関係の調整の結果、以下のD~Jの関係を経統的關係として認めた。それぞれの関係の説明を行なう。

D 属性

Da 「参照語」が「見出し語」の〜である。

Db 「見出し語」が「参照語」の〜である。

「参照語」が、「見出し語」に固有の性質、特徴、形状、構造である場合、この2つの用語は関係 Da を持つ。

また、「見出し語」が、「参照語」に固有の性質、特徴、形状、構造である場合、この2つの用語は関係 Db を持つ。

例) 和綴じ→和装本 (Db)

E 機能、役割、目的、活動内容

Ea 「参照語」が「見出し語」の〜である。

Eb 「見出し語」が「参照語」の〜である

「見出し語」が他の何らかの対象に、「参照語」という作用を及ぼす場合、この2つの用語は関係 Ea を持つ。

また、「参照語」が他の何らかの対象に、「見出し語」という作用を及ぼす場合、この2つの用語は関係 Eb を持つ。

例) 館外活動→自動車図書館 (Eb)

F 扱い、処理

Fa 「参照語」が「見出し語」で〜を受ける。

Fb 「見出し語」が「参照語」で〜を受ける。

「参照語」が「見出し語」において操作、始末、加工される場合、この2つの用語は関係 Fa を持つ。「参照語」が「見出し語」において新たに生み出されるようなこと、すなわち「参照語」の「見出し語」における産物性はない。「参照語」が「見出し語」において取りさばかれ、始末される場合にこの Fa に当てはまる。

また、「見出し語」が「参照語」において操作、始末、加工される場合、この2つの用語は関係 Fb を持つ。「見出し語」が「参照語」において新たに生み出されるようなこと、すなわち「見出し語」の「参照語」における産物性はない。「見出し語」が「参照語」において取りさばかれ、始末される場合にこの Fb に当てはまる。

例) 参考質問→参考調査業務 (Fb)

G 産物

Ga 「参照語」が「見出し語」の〜である。

Gb 「見出し語」が「参照語」の〜である。

「見出し語」が動作、作業であり、「参照語」がその動作を受けてできあがるものである場合、この2つの用語は関係 Ga を持つ。

また、「参照語」が動作、作業であり、「見出し語」がその動作を受けてできあがるものである場合、この2つの用語は関係 Gb を持つ

例) 索引→索引作成 (Gb)

H 利用、応用

Ha 「参照語」が「見出し語」で〜される。

Hb 「見出し語」が「参照語」で〜される。

「参照語」が「見出し語」という場において、道具として用いられる性格を持つ場合、この2つの用語は関係 Ha を持つ。

また、「見出し語」が「参照語」という場において、道具として用いられる性格を持つ場合、この2つの用語は関係 Hb を持つ。

例) さわる絵本→視覚障害者サービス (Hb)

I 規則、手法、方法

Ia 「参照語」が「見出し語」の〜である。

Ib 「見出し語」が「参照語」の〜である。

何らかの規準や決まりである「参照語」に基づいて、「見出し語」が行われたり、営まれたりする場合、この2つの用語は関係 Ia を持つ。

また、何らかの規準や決まりである「見出し語」に基づいて、「参照語」が行われたり、営まれたりする場合、この2つの用語は関係 Ib を持つ。

例) 学校図書館→学校図書館法 (Ia)

J メディア、場

Ja 「参照語」が「見出し語」の〜である。

Jb 「見出し語」が「参照語」の〜である。

扱われる情報=「見出し語」の場として「参照語」が用いられる場合、すなわち情報=「見出し語」が媒体=「参照語」を介して取り扱われる場合、この2つの用語は関係 Ja を持つ。

また、扱われる情報=「参照語」の場として「見出し語」が用いられる場合、すなわち情報=「参照語」が媒体=「見出し語」を介して取り扱われる場合、この2つの用語は関係 Jb を持つ。

例) 柱→欄外標題 (Jb)

この例で言うと、欄外標題と柱の関係は、定義文より①柱に記された標題を欄外標題という場合と、②欄外標題のことを柱と称する場合の2通りがあり、①の

専門用語辞書の「をも見よ」参照に関する調査研究

意味で参照が出されたと判断するとき、この参照関係はJに分類される。なお、2つ以上の意味関係で出されていると考えられる参照の扱い方は、本章の末尾で示す。

ウ その他（各辞書の個別の性格との関連でのみ説明できる関係）

見出し語と参照語の関係を、一般的に了解可能な一語（属性、産物、メディア等）で表すよりも、その見出し語と参照語が扱われる主題や環境において特有な「関係を示す『文章』」によって表すほうが自然であると考えられるものが、この関係ウを持つ。

例) 海賊版→著作権

この例で言うと、定義文から『著作権』条約加盟国間で、他国の著作物を『著作権』者に無断で複製・刊行した出版物を『海賊版』という」等の言い方はできても、海賊版と著作権との関係を1語で述べるのは困難である。よって、無理矢理この2語の間に特有な意味関係を取り出して、他の対の用語にも当てはめようとするよりは、この2語の関係を個別に扱うほうが適当と考えられる。

見出し語と参照語の間の意味関係については、各用語の定義や上位語によっては辞書間で異なった解釈が可能になる場合もあるが、具体的な関係付けとしては、以下のように行なうことができた。1対の見出し語—参照語が同じ定義文中に現れており、その2語の関係を明示する表現が存在する場合は、それを利用して関係付けた。1対の用語が同じ定義文中に現れない場合は、定義文の文脈から読み取れる関係を第一に考えた。また、1対の

用語が同じ定義文中に現れたときでも、そのどちらか（あるいは両方）が専門用語でありながら意味が1つに確定していない場合、すなわち意味に揺れが存在している場合（例えば“狭義には～で、広義には～、という場合）は、それが見出し語であれば、どの意味との関連において参照を出しているかを確認し、それが参照語であれば参照語のどの意味に対して参照が出ているかを確認することで、2つの用語間の関係を確定した（よって各辞書の持つ解釈により同じ2対の用語の意味関係が異なることも考えられる）。また、ある1対の用語において、それぞれの意味の揺れにより、2つの意味において参照が出されていると判断できる場合は、2重に記号を付与し、分類した（例：和綴じ」と「和装本」はA4とDbの両方に分類することができる）。なお、1対の用語が2つの統合的關係に分類されることはなかった。

IV. 調査結果と考察——専門用語辞書における「をも見よ」参照のあり方

IIIで述べた意味関係によって分類した「をも見よ」参照の数的データを第4表～第6表に示す。系列的関係と統合的關係の二重分類を認めたので、第6表における各辞書の参照語の合計は、第2表、第3表の総数Raよりも、二重に付与した分（『図書館用語集』で9個、『図書館用語辞典』で1個）だけ大きくなっている。以下では、様々なレベルにおける意味関係の分類を第一の枠組みとして、数量的に認められる顕著な傾向や方向性の傾向、具体的な用語の例などを手掛かりに、参照関係のあり方について考察を加えていくことにしたい。

第4表 意味関係による「をも見よ」参照の分類（その1）

辞書別 個数と比率		意味関係				イ 統合的 関係	ウ その他	合計
		ア 系列的関係						
		A	B	C	計			
ALA 図書館情報学辞典 (ALA)	個数	181	6	0	187	3	7	197
	比率%	92	3.0	0	95	1.5	3.6	100
図書館用語集 (JLA)	個数	40	47	4	91	22	7	120
	比率%	33	39	3.3	76	18	5.8	100
図書館用語辞典 (角川)	個数	40	49	0	89	40	14	143
	比率%	28	34	0	62	28	9.8	100
全辞書での比率 %		51	25	1.1	78	16	6.4	100

第5表 意味関係による「をも見よ」参照の分類 (その2)

辞書別 参照の種類		意味関係	ア (系列的関係) 個										
			A 1	A 2	A 3	A 4	B a	B b	C a	C b			
ALA 図書館情報学辞典 (ALA)	一方向		4	4	4	3							
	相互		80	41	27	18	4	2					
図書館用語集 (JLA)	一方向		2		1	3	7	21					
	相互		7	1	14	12	11	8	2	2			
図書館用語辞典 (角川)	一方向		6	4	5	20	39	8					
	相互			3	1	1		2					
全辞書での比率 %	一方向		9.53	7.68	8.61	12.1	14.6	16.0	0	0			
	相互		18.4	16.5	14.5	11.9	5.99	9.74	.952	.952			
	全参照		18.1	9.51	10.8	12.6	14.8	10.7	.556	.556			

第6表 意味関係による「をも見よ」参照の分類 (その3)

辞書別 参照の種類		意味関係	イ (統合的關係) 個														ウ 個	ア+イ+ウ 合計 個
			D a	D b	E a	E b	F a	F b	G a	G b	H a	H b	I a	I b	J a	J b		
ALA 図書館 情報学辞典 (ALA)	一方向					1											4	20
	相互					1	1										3	177
図書館用語集 (JLA)	一方向		1	1		1	1		1		3	2	1				5	50
	相互				1	1				1	2	1	1	2	2	2	2	70
図書館用語辞 典 (角川)	一方向			1	1	2	8	1		1	2	15		5			13	131
	相互												2	2			1	12
全辞書での比 率 %	一方向		.667	.921	.254	.510	4.37	.921	0	.921	.510	5.83	1.33	1.94	0	0	13.3	100
	相互		0	0	.477	0	.665	.188	0	0	.477	.952	6.04	6.04	.952	.952	4.29	100
	全参照		.278	.511	.511	.467	2.76	.680	0	.511	.744	4.89	1.30	2.19	.556	.556	6.39	100

A. 全体的傾向

最上位の意味関係の分類, すなわち, ア「系列的関係」とイ「統合的關係」, ウ「その他」という区分のレベルに着目すると, 全体としては, 系列的関係が約78% (兄弟関係が約51%, 上下関係が約25%) で, 統合的關係が約16% (利用・応用が約5.6%, 規則・手法・方法が約3.5%) と, 系列的関係が圧倒的に多いことがわかる。けれども, 辞書別に見ると, どの辞書でも系列的関係が多い点では変わらないとはいえ, 傾向はかなり異なってくる。『ALA 図書館情報学辞典』の場合, 約95%が系列的関係に属し, 統合的關係に属する参照は本当にわずか

1.5%) であるのに対して, 『図書館用語集』では系列的関係の比率は約76%, 統合的關係が約18%であり, さらに, 『図書館用語辞典』では, 系列的関係が約62%, 統合的關係が約28%となっている。

系列的関係と統合的關係における以上のような傾向は, II章で簡単に整理した各辞書の性格, 特に定義に現われているような辞書の姿勢と対応していることが伺える。『ALA 図書館情報学辞典』では, 定義は「上位概念+限定部」という形をとり, それ以外の付加的な説明はあまり加えられていない。すなわち, 『ALA 図書館情報学辞典』における用語の提示は, 上下関係を中心とする

系列的関係により構成されるような概念体系を下敷きとしていてと考えられ、参照語のあり方にもそれが反映していることが伺えるのである。これに対して、「上位概念+限定部」という定義を中心としながらもそれにしばしば付加的な説明が加えられる『図書館用語集』では、それに対応する形で統合的關係に立つ参照語の相対的比率が『ALA 図書館情報学辞典』に比して多くなっている。そして、テーマや事項の説明という色彩が定義において最も強く現われている『図書館用語辞典』では、テーマや事項の説明が必然的にいわば統合的關係に対応するような説明の展開を見せるのに対応して、参照語における統合的關係の比率が3辞書中で最も高くなっているのである。

もちろん、これは全体としての辞書の傾向として言えることであり、個別の項目について言えることではない。また、定義と参照とに代表される辞書の構成要素の相互關係に相関があると述べているだけなので、参照(および定義)に関してどのようなあり方が望ましいかといった規範的な結論を導けるわけでもない。けれども、全体としての辞書の性格に対応する形で、定義と参照が相関している傾向が見られることは興味深い。以上のことを頭に置きながら、次に個別の關係について検討していくことにする。

B. 個別の關係について

1. 系列的關係 (ア)

上述したように、全体として見ると系列的關係が約78%を占め、その比率の最も低い『図書館用語辞典』においても、全体の約62%が系列的關係であった。系列的關係に属する個別の關係を見ると、兄弟關係が系列的關係のうち約62% (全關係のうちの約51%) で圧倒的に多く、次に上下關係が来る。全体部分關係はほとんど見られない。この事実から、「をも見よ」参照においては、上下關係を中心に作られる生物分類的な概念の階層体系に基づいて、その体系中での用語が表わす概念の位置付けを示すことがその基本的な役割であることが分かる。

辞書別に見るならば、『ALA 図書館情報学辞典』ではほとんどが兄弟關係にある用語間の参照であるのに対して、『図書館用語集』と『図書館用語辞典』では兄弟關係と上下關係の数があまり変わらないという顕著な違いが見られる。全体部分關係は数が少なく、一般的な考察が出来ないので、以下では、兄弟關係と上下關係について考察する。

a. 兄弟關係 (A)

3つの辞書の中で、兄弟關係が相対的に最も多いのは『ALA 図書館情報学辞典』である。『ALA 図書館情報学辞典』では、参照のほとんどが兄弟關係であり、他の關係はむしろ例外的とすら言える。「参照の基本は兄弟關係、その他は例外」というわけである。また、『ALA 図書館情報学辞典』ではほとんどが相互参照であり、一方向参照は例外的である。これらから、『ALA 図書館情報学辞典』においては、辞書全体として、まず「上位概念+限定部」という形の定義によって用語の縦の帰属關係を示し、さらに参照語によって、見出し語と並列の關係にある横の張り合いを示すという構成をとっていることがわかる²²⁾。兄弟關係の下位分類についていうならば、『ALA 図書館情報学辞典』では両立共下位關係が多いが、実際の語彙全体においても、兄弟語の中では両立共下位語が多いであろうから、その点を考慮すると特に目立った特徴であるとは言えないかもしれない。

一方、『図書館用語集』と『図書館用語辞典』でも兄弟關係の相対的な比率は大きく、それなりに重要であることが伺えるが、『ALA 図書館情報学辞典』のように、特權的な位置づけを持っているわけではない。また、『図書館用語集』では相互参照の割合が大きく、一方向参照は一応例外的と考えてもよいが (とはいえ、この傾向は『ALA 図書館情報学辞典』ほど顕著ではない)、『図書館用語辞典』では一方向参照の割合が圧倒的に大きい。これは、『図書館用語辞典』が、テーマや事項を解説するという要素が強く、従って、用語が表す概念の固定的な体系を提示することよりも、概念同士の歴史的、空間的場における現実の隣接關係を重視していることと対応していると解釈することができる。すなわち、必ずしも対称でなく、それゆえ相互に参照を出すことが一貫性の点から望ましいと断定できない、主として統合的關係に属する關係において一方向の参照を出すという総体的傾向が『図書館用語辞典』にあり、兄弟關係にある項目間の参照にも同様の傾向が反映されていると見るのできるのである。『ALA 図書館情報学辞典』を基準に考えると、『図書館用語集』では A3 と A4 の比率が、『図書館用語辞典』では A4 の比率が高くなっている。A3 という關係については、上位概念によって与えられる一般的な場における「依存兄弟語が形成する場」と「その依存兄弟語以外の下位語が形成する場」との差異という要因があるので、「依存兄弟語が形成する場」を他から際立たせるために、この關係 A3 を参照によって明示する動機づ

けが A1 や A2 に比べて強くなっているとも言える。また、A4 においては他の兄弟関係のように差異を考慮するのみでなく、共通部分をも考慮しなくてはいけないという意味で、やはり A1 や A2 よりも関係を示す動機づけは強いと考えられるから、『図書館用語集』と『図書館用語辞典』における傾向はある程度納得のいくものではある。

規範的な観点から兄弟関係の参照を考えると、我々の辞書の利用は、やはり項目単位の参照を中心とするものであり、たとえ主題解説が有用であるとしても、それと同時に体系的な概念関係が提示されていることが望ましい²³⁾。従って、互いに同格である兄弟語については、一方向の参照ではなく相互の参照を基本とし、どちらの見出し語から引いても、相手が相互に対等であることが示されるべきであろう。特に A2 の独立兄弟関係については、見出し語となるような確固たる上位語が存在しないので、その二つの用語が相補的に表している場を明確にするためにも相互参照が望ましいと考えられる。

b. 上下関係 (B)

全体を見ると、上下関係では相互参照よりも一方向参照が多いが、『ALA 図書館情報学辞典』では相互参照のみを出している。『ALA 図書館情報学辞典』の上下関係の例を見ると、単純な上下関係という以上の何か目印があるような例が多い²⁴⁾。このことは、『ALA 図書館情報学辞典』においては兄弟関係以外は例外的であるという前述の考察を支持するものと言えよう。

『図書館用語集』では、一方向、相互のどちらもあるが、一方向参照では Bb 参照 (下位への参照) が多く、2つの用語が上下関係にあるとき、下位語への参照が出され易いことが分かる。一般に上位語よりも下位語の数が多いので、辞書全体としては1つの項目から多数の参照が出されることになる。このことは、第2表から得られる『図書館用語集』の特性 ($Ra/Er=1.5$ と大きいこと等) と矛盾しない。つまり、『図書館用語集』では、1つの項目 (上位語) から多数の下位語へと導いていく分散型の参照方法を重視しているといえる。一方、『図書館用語辞典』の B 参照は一方向が多く、その中では Ba が圧倒的に多い (ちなみに Ra/Er は約 1.2 であり、『図書館用語集』に比べ小さい)。ここから、『図書館用語辞典』は上位語へ向かって多数の項目 (下位語) から参照を出す、統括型の参照方法と言えよう。

これらから、上下関係の参照における方向性が、定義を補い、また定義における傾向を受け継いでいるという

一応の傾向を認めることができる。すなわち、『図書館用語集』は、主題解説的な定義を与える傾向も多少はあるが、定義部分の中心は「上位概念+限定部」であり、下位語の説明もまとめて行なっている場合以外には、定義中での下位語への言及は少ない。そこで、全体としてはその部分を明示的に下位語へ言及することにより補っていると考えられる。一方、『図書館用語辞典』は主題解説的な色彩が強く、一つの項目中の定義・説明部分において様々なトピックが扱われるために、見出し語の位置付けがともすると散漫になりがちになるところを、上位語への参照を出すことにより補っていると解釈することができる。

2. 統合的關係 (イ)

既に述べたように、統合的關係は全体の約16%であり、系列的關係と比べてかなり少ない。ただし、『ALA 図書館情報学辞典』では統合的關係がほとんど見られないのに対して、最も統合的關係の比率の高い『図書館用語辞典』では約28%と、かなりの比率を占めている。前述したように、これは、『図書館用語辞典』がテーマや事項を解説する辞書という性格を強く持っていることに対応していると考えられる。

一つ一つの関係については、データの数が少ないものも多く、全てについて一般的な傾向を導くことはできないし、また、一つ一つの統合的關係のレベルで辞書の性質との関係を論ずることもデータ量からいって難しい。以下では主だった意味関係に関して、特に方向性との関係を考察していくことにする。

a. 扱い、処理 (F)

統合的關係の中では唯一全ての辞書において見られる関係である。全体として、また特に『ALA 図書館情報学辞典』と『図書館用語集』ではデータ数が少ないが、『図書館用語辞典』では、扱い、処理を受ける側が参照語、加える側 (場あるいは扱い・処理自体) が見出し語となっている場合が多い (例えば、見出し語: 漢字制限, 参照語: 常用漢字)。この理由として、扱い、処理を受ける側は一般に実体としてそれ自体安定している一方、ありうる扱いや処理は多様である可能性が高いため、特別の場合を除いて、扱いを加える側を明示することは不当に扱いを受ける概念の位置づけを狭めてしまうことになる恐れが多分にあること、それに対して、扱う側は、扱いを受ける概念を指定することによりむしろ位置づけが具体性をもってはっきりするという傾向が強いのではないかとことが挙げられよう。

b. 利用, 応用 (H)

『図書館用語集』、『図書館用語辞典』ともに、Hb の一方向参照が、統合的關係の中で一番多い。すなわち、「見出し語」が「参照語」で利用、応用される、という關係が、一番多いのである(例えば、見出し語: 拡大読書器, 参照語: 視覚障害者サービス)。關係 H は、定義のところでも述べたが、道具性において、参照が分類されるためのものである。道具は、どのような状況や場、あるいは主体で利用されるかが重要であり、そのために Hb の關係において参照が出されると考えられる。逆に、Ha の参照(例えば、見出し語: カード複製, 参照語: ユニットカード)は、役割を考えるならば、場や主体を、そこで用いられる(もしくはそれが用いる)道具との關係で位置づけるということになるが、一般に、道具は、場や主体から見ると、一次的重要性を持つものではないと思われる。従って、特別な例を除いては、道具に対して場や主体の側から参照を出す動機は少ないと考えてよいであろう。

c. 規則, 手法, 方法 (I)

『図書館用語集』と『図書館用語辞典』に見られ、一方向と相互のどちらの場合もあるが、『図書館用語辞典』の一方向は Ib のみに片寄っている。一般論として、ある対象にとってそのための規則や手法、方法などは、道具の場合と同様、その対象を特徴付けるには二次的であると考えられるから、どちらかというとき Ib の方向の参照、すなわち見出し語が規則、手法、方法である場合の方が参照を出す意義がある場合は多そうである。

3. その他 (ウ)

量的にはこの關係に分類されるものはあまりなかった。それぞれの關係を見てみると、意味關係としてとらえようとするならば、多くが非常に間接的な統合的關係とでもいったものになるといえる。例えば、「ライン・アンド・スタッフ組織」と「ライン権限」や「貸出記録」と「貸出中」、「買切り制度」と「取次ルート」などは、こじつけようとするならば、統合的意味關係の組み合わせで両者を結び付けることができよう。

けれども、そのような説明を始めるならば、非常に多くの用語同士が少なくとも潜在的には参照關係で結ばれようということになり、そもそも参照關係を整理して考える最初の手掛かりとして意味關係を持ち出した意味がなくなってしまう。実際、このグループに属するデータは、例えば「ライン・アンド・スタッフ組織」と「ライン権限」が、どちらかというとき周辺の領域から借用し

てきた用語で、これに関連する用語群を図書館・情報学の他の用語と区別してまとめるために参照が出されているのではないかと説明することが可能なように、かならずしも狭い意味での見出し語と参照語との間の意味關係からはとらえられない面があるように思われる。

V. おわりに

本稿では、見出し語と参照語との間の意味關係を手掛かりとして、3つの専門用語辞書における実際の参照を調査することにより、「をも見よ」参照の性質について考察した。その結果、以下のようないくつかの側面から、参照の性質を明らかにすることができた。

- (1) 参照が出され得る意味關係のタイプ: 「メディア (J)」のように分野依存の傾向が強いものもあるが、概ね一般的な意味關係をその量的傾向と共に明らかにすることができた。これは、参照を出す上での一般的な必要最低条件と解釈することができる。
- (2) 定義のあり方にも反映するような辞書の一般的性質と参照關係との關係: より具体的には、全体としての定義のあり方と参照のあり方との相互關係を示した。
- (3) いくつかの特定の意味關係における参照の方向性の傾向: 統合的關係における参照の方向性の違いを明らかにした。
- (4) 参照の方向性と辞書全体の性格との關係: 上下關係における方向性と辞書の性質との関連を明らかにした。

これらのうち、(1) は、明確に実証的な分析の結果であり、(2)、(3)、(4) については、(1) の結果を踏まえた解釈の結果である。これにより、ようやく、辞書における参照關係に関する研究に一步踏み込むことが出来たわけであるが、今後は、今回の解釈の結果をも踏まえ、新たにデータを分析することにより、参照關係に関する考察をさらに深める必要がある。具体的には、以下のような方向で研究を展開することが重要である。

- 別の領域の辞書などに対する、より大規模なデータへの分析の適用。これによって今回の分析考察結果の追認と精緻化が可能になるであろう。ただし、このときには、単なる分析の大規模化だけでなく、以下に述べるような分析の深化をも同時に計るべきである。
- 参照關係が出される場合の十分条件の考察。このた

めには、主要な意味関係について、その意味関係を持ちながら参照が出される場合と出されない場合とを比較考察することが不可欠になる。そのための適切な分析手続きも含めて、今後の課題である。

- ・今回は全体としての辞書そして定義の性格と参照の性格との関係は考察したが、個別の項目における定義と参照のあり方の考察は行なわなかった。今後、項目単位でこの関係を分析することにより、辞書の性格と参照の性格について新たな知見が得られるかも知れない。また、例えば見出し語の立てかたなど、定義以外にも辞書の様々な構成要素と参照との相互関連を考えていく必要があろう。

これらの点について、今後分析を進めると同時に、対象を「をも見よ」参照のみでなく「を見よ」参照にも広げ、辞書における参照の問題を多面的に考えていく必要があろう。

- 1) 例えば、辞書に関する最近の関心の高まりを反映して、*International Journal of Lexicography* という辞書関連の研究を専門に扱う論文誌が1988年から刊行開始され、また、国際会議も1980年代の後半から定期的に開催されている。
- 2) Opitz, K. “標準化された術語辞書”. *Lexicography: Principles and Practice*. Hartmann, R.R.K. ed. London, Academic Press, 1983. (“標準化された術語辞書”. 木原研三他監訳. 辞書学 その原理と実際. 東京, 三省堂, 1984, p. 65-78.)
- 3) 長尾 真. “辞典形式での専門分野の知識の体系的構成法”. 人工知能学会誌. Vol. 7 No. 2, 1992.
- 4) 長尾 真. “専門用語辞典の体系的構成法”. 専門用語研究. 第5号, 1993, p. 3-19.
- 5) Hettai, P. “Contrastive Analysis of Terminological Systems and Bilingual Technical Dictionaries” *International Journal of Lexicography*. Vol. 1, No. 1, 1988. p. 32-40.
- 6) Riggs, F. W. “Terminology and Lexicography: Their Complementarity”. *International Journal of Lexicography*. Vol. 2, No. 2, 1989, p. 89-110.
- 7) 専門用語辞書の凡例や手引き、前書きにおける参照の解説には、以下に示すように、ほとんどが「関連する」という点しか書かれていない。あとは、「理解を助ける」という機能的または目的論的な記述のみである。
 - ・大山正他編. 心理学小辞典, 有斐閣, 1978, 313 p. “関連の深い項目” “理解がさらに深められる”
 - ・外林大作他編. 誠信心理学辞典, 誠信書房, 1981, 680 p. “関連のある”
 - ・小口偉一他監修. 宗教学辞典, 東大出版会, 1973, 813 p. “関連, 参照項目は”
- 8) 辞書学関係の文献でも、参照に関してのまとまった記述や研究は見られない。なお、図書館・情報学関係では件名標目表の参照に関する研究などがあるが、専門用語辞書というツールにおける参照の性質を扱う本研究では直接参考にはならない。
- 9) ここで、一貫性が保証されていない現実の辞書における参照語を調べることにより、参照語の性質を把握することができるかどうかという問題がある。これについては、(1) 一貫性が保たれていないといっても辞書それぞれの性格は全体として参照語のありかたに反映されていること、(2) 一つ一つの参照語には、それが付与された明白な理由が必ずあること、という二つの点を考えると、問題にならないといえることができる。
- 10) 長澤雅男他編. 学術用語集 図書館情報学編 暫定版. 東京大学教育学部図書館学研究室, 1993, 181 p.
- 11) Young, H. ed. *The ALA Glossary of Library and Information Science*. Chicago, American Library Association, 1983. 245 p. (ALA 図書館情報学辞典. 丸山昭二郎他監訳, 東京, 丸善, 1988. 328 p.)
- 12) 日本図書館協会図書館用語委員会編 図書館用語集. 東京, 日本図書館協会, 1982. 396 p.
- 13) 図書館問題研究会. 図書館用語辞典. 東京, 角川書店, 1982. 777 p.
- 14) 定義中で用いられ、見出し語としても立てられている用語は、参照語フィールドでさらに参照が出されているものとそうでないものがあることから、参照語フィールドにある語とははっきりと区別して扱われていることが明らかであるので、参照語フィールドにあるもの以外は参照語としない。なお、ALA 図書館情報学辞典においては“をも参照のこと”という言語表現が定義の途中に組み込まれている場合が例外的にほんのわずかある(今回のサンプル中では「参考調査業務」の項目が1例)が、固定した位置に現れることという本論文での操作的な定義を重視して、このような例外は分析の対象としなかった。これは、例がわずかなので除外しても本論文の分析には問題がないと判断したことによるが、より積極的には、辞書のようなツールにおいて「視覚的に固定された位置に現れる」といった手掛かりから定義などとは独立したものと理解できる「参照」という概念を一貫して保ちたかったからである。しか

専門用語辞書の「をも見よ」参照に関する調査研究

- しながら、ALA 図書館情報学辞典のようなタイプの構成をとる辞書における参照の位置付けについてはそれ自体改まった検討の対象とならう。
- 15) 言語の音と意味との間にはオノマトペのような特殊な場合を除いて動機づけされた関係は基本的にはないので、このサンプル抽出は一応ランダムであると考えるよ。
 - 16) 國広哲弥. 意味論の方法. 東京, 大修館, 1982, 300 p.
 - 17) Cruse, D. A. *Lexical Semantics*. Cambridge, Cambridge University Press, 1986.
 - 18) Aitchison, J. and Gilchrist, A. *Thesaurus Construction*, 2nd ed. London, Aslib, 1987. 邦訳: 内藤衛亮他訳. シソーラス構築法, 東京, 丸善, 1989.
 - 19) 黒橋禎夫他. “専門用語辞典の自動的ハイパーテキスト化の方法”. 人工知能学会誌. Vol. 7, No. 2, 1992.
 - 20) 上位概念などの存在は、常に特定の主題領域において判断する。これは他の関係においても同様である。
 - 21) 荻野綱男. “シソーラスのための語彙の意味分類をめぐって——「焼き魚」は魚か”. 日本語学. 第 12 卷, 5 号, p. 18-30 (1993).
 - 22) ただし、すべての兄弟語に参照を付与する方針であると言っているのではない。この点については、ある意味関係にある用語のうち参照が出されている場合と出されていない場合との違いを検討しなくてはならないが、それは今後の課題である。
 - 23) また、『図書館用語辞典』の兄弟関係の参照の個々の例を見るならば、一般的傾向として見られる、主題解説的に現実的な概念同士の隣接関係を重視する姿勢をもって一方向の参照であることを擁護できると思えない。
 - 24) 例えば、「大容量記憶装置」と「補助記憶装置」の例では、まず、これらの 2 語は異なった視点から見た「記憶装置」の下位語であると考えられる。すなわち、「記憶装置」と「大容量記憶装置」という単純な上下関係、あるいは「記憶装置」と「補助記憶装置」という単純な上下関係をまず自然に考えることができる。ところが実際の定義文により、「大容量記憶装置」が「補助記憶装置」の下位語であることが明示されており、上に述べたような単純、自然に考えられる上下関係とは異なった、少し特殊な上下関係においてあえて参照を出していると言うことができる。

付録：意味関係による参照の分類結果

表における記号「一」,「相」は,それぞれ,その参照が「一方向参照」,「相互参照」であることを示す。また,参照語欄の括弧内の記号は,その参照語と見出し語の関係を,記号が表わす関係へも分類したことを表わす。

意味関係	辞書名	参照方向	見出し語	参照語
A 1	ALA	一	画像表示装置 完全無線綴じ バッチ処理 マイクロコンピュータ	タッチ・ターミナル 広げ無線綴じ オンライン処理 大型コンピュータ
		相	アクティブ・ファイル アクティブ・ファイル アップケース文字 アナログ回線 アナログ計算機 アナログ計算機 アナログ・データ アナログ・データ伝送 アルファベット順分類目録 アルファベット順分類目録 アルファベティック・コード アルファベティック・コード 開架式書庫 階層表記法 かがり 隠しジョイント 学術雑誌 拡大焼付け機 画像反転フィルム 画像表示装置 画像表示装置 可変長フィールド 可変長フィールド 可変長レコード 可変的助記性 可変的助記性 下方向参照 カメラ・カード 乾式ジアゾ感光紙 乾式法 環状ネットワーク 環状ネットワーク 環状ネットワーク 間接地域細目 完全記録貸出方式 完全結合形ネットワーク 完全結合形ネットワーク 完全結合形ネットワーク 完全目録作業 完全目録作業 幹部権限 幹部権限 簡略目録作業 簡略目録作業 簡略目録作業 簡略目録作業 雑誌 参照完備目録 参照不備目録 体系的助記性 体系的助記性 多重処理 ダブルドット 単一記号法 単一記録貸出方式 単向伝送	休止中ファイル デッド・ファイル ローケース文字 デジタル回線 デジタル計算機 ハイブリッド計算機 デジタル・データ デジタル・データ伝送 直接アルファベット順目録 分類目録 英数字コード 数字コード 閉架式書庫 順序表記法 綴じ 露出ジョイント 雑誌 コンタクト・プリンタ 直接画像フィルム CRT端末機 プリンタ端末機 固定フィールド 自由フィールド 固定長レコード 偶然的助記性 体系的助記性 上方向参照 コピー・カード 湿式ジアゾ感光紙 湿式法 完全結合形ネットワーク 分散形ネットワーク 星形ネットワーク 直接地域細目 限定記録貸出方式 環状ネットワーク 分散形ネットワーク 星形ネットワーク 簡略目録作業 重点的目録作業 ライン権限 職能的権限 完全目録作業 重点的目録作業 学術雑誌 参照不備目録 参照完備目録 偶然的助記性 可変的助記性 同時処理 デュオトーン 混合記号法 二重記録貸出方式 二重伝送

専門用語辞書の「をも見よ」参照に関する調査研究

意味関係	辞書名	参照方向	見出し語	参照語
			单向伝送 単字印刷装置 短寿命フィルム 短寿命フィルム 短寿命フィルム 単層書架 背景濃度 ハイブリッド計算機 ハイブリッド計算機 バックグラウンド処理 バックグラウンド・プログラム 発生主義会計 ハードカバー本 ハード・コピー パラメトリック統計 反射コピ方式 反射式ファインダー・システム 半二重伝送 半二重伝送 汎用コンピュータ マイクロコンピュータ マイクロコンピュータ ライノタイプ ライン権限 ライン権限 ライン・プリンタ	半二重伝送 ライン・プリンタ 永久寿命フィルム 長寿命フィルム 中寿命フィルム 積層書架 線濃度 アナログ計算機 デジタル計算機 フォアグラウンド処理 フォアグラウンド・プログラム 現金主義会計 ペーパーバック ソフト・コピー ノンパラメトリック統計 透過コピ方式 光学式ファインダー・システム 二重伝送 单向伝送 専用コンピュータ ミニコンピュータ 中型コンピュータ モノタイプ 職能的権限 幹部権限 単字印刷装置
	JLA	一	配本所 マスター・ファイル	停本所 トランザクション・ファイル
		相	貸出図書館 刊本 雑誌 参考図書館 単行書 和漢書 和装本	参考図書館 写本 新聞 貸出図書館 叢書 洋書 洋装本
	角川	一	カード目録 三次資料 三次資料 白書 和数字 和数字	冊子目録 一次資料 二次資料 青書 アラビア数字 ローマ数字
A2	ALA	一	アセンブラ 酢酸セルロース 三酢酸セルロース 排列要素	コンパイラ 硝酸セルロース 硝酸セルロース 非排列要素
		相	アセンダー アプローチ・ターム アルゴリズム 外延 回線交換 概念の外延 概念の内包 カセット 肩注 肩見出し カートリッジ 下面照明器 鑑定	ディセンダー 探索語 ヒュリスティック 内包 データ交換 概念の内包 概念の外延 概念の内包 カートリッジ 肩見出し 肩注 カセット 上方照明 証明

意味関係	辞書名	参照方向	見出し語	参照語
			財務統制 削除 差込み 棚受け タブ タブレット帳 内包 ハードウェア 花車 バーニング 貼込み 貼付け マージング ライト・リーディング Y軸 Y理論 索引図 タグ タスク 探索キー パスワード 発注前書誌調査 発注前書誌調査 バリディ・ヒット パンフレット製本 パンフレット様式 マイクロ化による資料保存 マイクロコード	予算統制 消去 外入れ 支柱 爪かけ見出し コーデックス 外延 ソフトウェア 筋車 覆い焼き 正誤表 象眼 照合 リバーズ・リーディング X軸 X理論 地図索引 フラグ オペレーション ファイル・キー ユーザ登録名 事前目録調査 書誌情報の確認 チェック・デジット パンフレット様式 パンフレット製本 保存のためのマイクロフィルム化 ファームウェア
	JLA	相	貸出方式	閲覧方式
	角川	—	開架 開館時間 開館日 前付け	閉架 閉館時間 日曜開館 後付け
		相	開館日 大項目主義 大項目主義	休館日 小項目主義 中項目主義
A3	ALA	—	アンカット 数物製本 酢酸繊維素フィルム らせん綴じ	アンカット本 図書館製本 硝酸フィルム 二重針金綴じ
		相	網目すき紙 案内業務 海賊版 会費制図書館 貸出手続き 株主制図書館 裁過本 最高位数字 裁断小口 最低位数字 索引語リスト 参考調査業務 台本(脚本) 多色印刷 探索語 団体記入 団体記入 ハウスキーピング文書	簀の目入り紙 参考調査業務 未承認版 株主制図書館 返却処理 会費制図書館 シュエイプト 最低位数字 トリム<小口> 最高位数字 ストップ・リスト 案内業務 上演版 原色印刷 アプローチ・ターム 個人名記入 著者記入 プログラム文書

専門用語辞書の「をも見よ」参照に関する調査研究

意味関係	辞書名	参照方向	見出し語	参照語
			パンクロフィルム マイクロ形態資料 マイクロ再出版 マイクロ写真技術 マイクロ写真技術 マイクロ出版 マクロ形態資料 マクロ撮影 マクロ撮影	オルソフィルム マクロ形態資料 マイクロ出版 マクロ撮影 顕微鏡写真術 マイクロ再出版 マイクロ形態資料 顕微鏡写真術 マイクロ写真技術
	JLA	一	廃棄	除籍
		相	改装本 海賊版 海賊版 学校司書 卷子本 索引誌 冊子 縦本 バックキング 枚 丸味出し 落丁 乱丁 和本	原装本 偽作 偽書 (Ba) 司書教諭 冊子 抄録誌 卷子本 横本 丸み出し 丁 バックキング 乱丁 落丁 唐本
	角川	一	アメリカ図書館協会目録規則 貸出図書館 学級招待 学級文庫 博物館の資料	アメリカ議会図書館記述目録規則 保存図書館 学校訪問 学校図書館 博物館資料
		相	アウトリーチ	エクステンション・サービス
A4	ALA	一	課 前書き 乱数	部 序論 疑似乱数
		相	アルマナック 学部図書館 からみかがり綴じ カリキュラム教材センター カーリング カール 管理マニュアル 管理マニュアル 残本 代理店 多重処理 多重プログラミング タスク・フォース 排架能力 販売業者 販売業者 マイクロフィッシュ目録 マイクロフィルム目録	年鑑 主題別図書館 オーバーソウイング 研究施設備え付けコレクション カール カーリング スタッフ要覧 組織内マニュアル 見切特価品 図書取次店 多重プログラミング 多重処理 特別委員会 収蔵可能量 書籍商 図書取次店 COM目録 COM目録
	JLA	一	後刷・後摺 唐綴 細目	増刷 線装 件名細目 (Bb)
		相	貸出期限単純方式	カード式貸出法

意味関係	辞書名	参照方向	見出し語	参照語
			片面刷 片面刷 カタログ カード式貸出法 簡略標題目録 細目 題簽・題箋 柱 貼外題 版 欄外標題	一枚刷 一枚もの 目録 貸出期限単純方式 チェック・リスト 区分 貼外題 (Jb) 欄外標題 (Jb) 題簽 (Ja) 刷 (Hb) 柱 (Ja)
	角川	一	カード箱 解説目録 貸出期限票 学校図書館 カバー 借上車 借上車 館外活動 館外奉仕 函架目録 刊行 参考質問処理票 参考事務 参考調査活動 短冊 発行 版型 ハンディキャップ・サービス ライブラリー・ビル・オブ・ライツ 和綴じ	カード・ケース ブック・リスト デート・スリップ 学校図書館 ブック・ジャケット 配本車 連絡車 対外活動 館外活動 書架目録 出版 質問処理票 参考業務 参考業務 スリップ 出版 大きさ 図書館利用に障害のある人々への サービス 図書館の権利宣言 和装本 (Db)
		相	館外活動	エクステンション・サービス
Ba	ALA	相	大容量記憶装置 はめ込み地図 パリティ・ビット 貸出期間更新処理	補助記憶装置 補足地図 チェック・ビット 貸出業務
	JLA	一	アルコープ型配置 カード式貸出法 カレント・アウェアネス・サービス 官庁出版物 巻頭書名 団体沿革カード 豆本	書架配置 単式貸出法 書誌奉仕活動 団体出版物 見出し標題 典故カード 極小版
		相	回顧録 海賊版 改題 カード目録 索引地図 雑誌 冊子目録 大学図書館 バーチカル・ファイル 増刷 和装本	伝記 偽書 (A 3) 異名同書 目録 地図 定期刊行物 目録 学術図書館 パンフレット整理 (Ib) 刷 製本
	角川	一	アメリカ議会図書館分類表 アルファベット順配列	分類表 配列規則

専門用語辞書の「をも見よ」参照に関する調査研究

意味関係	辞書名	参照方向	見出し語	参照語
			安全開架 案内標示 案内標示 カード配列規則 開架式閲覧法 回数券方式 改装製本 科学読物 学術雑誌総合目録 学術図書館 拡大写本 貸出しコスト 貸出統計 貸出率 カセット・テープ 片面書架 家庭配本 壁付書架 ガラス戸書架 館外貸出し 挿絵 雑誌 ダイジェスト 対面朗読サービス タウン誌 棚見出し 団体貸出し 内容細目 直木賞 ナショナル・ユニオン・カタログ ナトコ映写機 鉛活字 白書 パネル・ディスカッション マイクロカード マイクロフィッシュ マイクロフィルム	閲覧方式 図書館バーアール 利用案内 配列規則 閲覧方式 貸出方式 図書館製本 児童図書 総合目録 専門図書館 弱視者用図書 貸出しサービス指数 図書館統計 貸出しサービス指数 視聴覚資料 書架 身体障害者サービス 書架 書架 貸出し イラストレーション 逐次刊行物 翻案 視覚障害者サービス 商業出版誌 書架見出版 貸出し 内容注記 文学賞 総合目録 16ミリ映写機 活字 政府刊行物 集団討議法 マイクロ資料 マイクロ資料 マイクロ資料
B b	ALA	相	アクセス・ポイント 貸出業務	標目 貸出機関更新手続き
	JLA	一	貸出方式 貸出方式 貸出方式 貸出方式 貸出方式 貸出方式 貸出方式 カード式貸出法 カード式貸出法 仮製本 カレント・アウェアネス・サービス 漢籍 細目 細目 索引 索引 索引 マイクロ写真資料 マイクロ写真資料 和装本	カード式貸出法 写真式貸出法 単式貸出法 トークン式貸出法 トランザクション式貸出法 ニュワーク式貸出法 バーコード式貸出法 ブラウン式貸出法 ニュワーク式貸出法 ブラウン式貸出法 フランス装 エス・デー・アイ 唐本 件名細目 (A4) 内容注記 件名索引 順列式索引 要語索引 マイクロカード マイクロフィルム 卷子本
		相	愛書家	書狂

専門用語辞書の「をも見よ」参照に関する調査研究

意味関係	辞書名	参照方向	見出し語	参照語
G b	J L A	一	索引	索引作成
	角川	一	アンカット本	装丁
H a	J L A	相	貸出統計	貸出記録
	角川	一	カード複製 貸出統計	ユニット・カード 貸出しサービス指数
H b	J L A	一	書き始め語 貸出規則 雑誌受入記録	冒頭句索引 図書館利用案内 図書原簿
		相	貸出記録 版	貸出統計 刷 (A 4)
	角川	一	遊び アメリカ議会図書館分類表 アルファベット 拡大写本 拡大読書器 貸出申込書 活字 さわる絵本 タイムテーブル 対面朗読 団体名標目 団体名標目 来館者密度 ワークショップ 分かち書き	児童奉仕 分類 アルファベット順配列 視覚障害者サービス 視覚障害者サービス 貸出登録 活版 視覚障害者サービス 図書館労働実態調査 視覚障害者サービス 件名目録 著者目録 図書館調査 研修 語順配列
I a	J L A	一	貸出 雑誌受入記録	貸出方式 ビジブル・インデックス
		相	パンフレット整理	バーチャル・ファイル (Bb)
	角川	相	学校図書館 学校図書館	学校図書館基準 学校図書館法
I b	J L A	一	排列規則	目録編成
		相	バーチャル・ファイル	パンフレット整理 (Ba)
	角川	一	腔背本 貸出方式 活版 館則 大学設置基準	製本 貸出し 印刷 図書館運営 大学図書館
		相	学校図書館基準 学校図書館法	学校図書館 学校図書館
J a	J L A	相	貼外題 欄外標題	題簽 (A 4) 柱 (A 4)
J b	A L A	相	題簽・題箋 柱	貼外題 (A 4) 欄外標題 (A 4)
ウ	A L A	一	アセンブラ言語 ライン・アンド・スタッフ組織	コンパイラ ライン権限

意味関係	辞書名	参照方向	見出し語	参照語
			ライン・アンド・スタッフ組織 ライン・アンド・スタッフ組織	幹部権限 職能的権限
		相	多重プログラミング 版画 大容量記憶装置	同時処理 複製美術品 主記憶装置
	JAL	一	貸出記録 帯出者 雑誌 排架法 版	貸出中 帯出券 誌名 開架式 復刻
		相	貸出記録 貸出方式	貸出方式 貸出記録
	角川	一	悪書追放運動 買切り制度 海賊版 学校司書 割賦販売ルート 館種 再販売価格維持制度 索引作成 差別図書 差別用語 パターン配本 マルシー記号 夜間開館	青少年保護育成条例 取次ルート 著作権 学校図書館法 出版流通 図書館同種施設 独占禁止法 図書館業務の機械化 ピノキオ問題 言論出版の自由 依託販売制度 万国著作権条約 労働条件
		相	学校図書館	司書教諭